



## 聖家族 (ルカ 2:22-40)

腕に幼子を抱いているなら

聖家族の主日を迎えました。ご降誕からすぐなので、慌ただしい感じでした。来年は土曜日がクリスマスなので、さらに慌ただしくなるでしょう。ただ再来年は、日曜日がクリスマスなので、ホッとしています。来年のクリスマス、果たして新型コロナウイルスの感染は終息しているでしょうか。

他愛のない話を先にしますが、司祭たちは「月曜会」という夕食会を時々しています。たいてい四人です。先月の月曜会で、ある先輩神父様が、「今年から来年は説教が連続するから大変だ。クリスマス夜半の説教、クリスマス日中の説教、そのあとすぐに聖家族の祝日、やっと終わったと思ったら神の母聖マリア。そうこうしていたら1月3日は御公現だ。息つく暇も無い」と言っておりました。毎年のことですが、確かに余韻に浸ることはできませんでした。

考えると、ヨセフとマリアの夫婦も、イエスの誕生の余韻に浸る時間は無かったかも知れません。占星術の学者の訪問のあと、すぐにエジプトに避難しなければならなかったのはご存知でしょう。そもそも、マリア自身、これから起こることを「どうしてそのようなことがあり得ましょうか」と思ったわけですし、ヨセフもマリアのことを表沙汰にすることを望まず、密かに離縁しようと考えていました。こうした思いを引きずらずに、すぐに神の望みに従っていったのはすごいことです。

私たちに与えられた福音朗読は、幼子が神殿で献げられる場面の物語でした。シメオンが両親に連れられた幼子を見つけ、幼子を腕に抱きます。そして「神をほめたたえ」、それから両親を「祝福」します。おそらく、「主が遣わすメシア」(2・26)にお目にかかる瞬間を今か今かと待ち望んでいたわけですから、その時にどんな声をかけようか、何かしらのことばを用意していたかも知れません。それらも、いざお目にかかってみればすべて吹き飛んでしまったかも知れません。

しかし、シメオンは「聖霊が彼にとどまっていた」(2・25)ので、新しいことばが口をついて出たのです。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」(2・29-32) これら一連の出来事には、共通したものがあると考えました。それは「腕に幼子を抱いている」ということです。

マリアが天使のお告げを聞いた時、「どうしてそのようなことがあり得ましょうか」と尋ねましたがそれでもすぐに出来事を神に委ね、受けとめました。腕に抱いていたわけではありませんが、すでに「幼子を抱いている」と言える状態だったからでしょう。

ヨセフも思い悩むのをやめて、マリアを妻として迎えました。「腕に幼子を抱きかかえる」決心がついたからでしょう。シメオンも、女預

言者アンナも、祝福のことばを口にできたのは「腕に幼子を抱いている」預言者だったからこそできたわけです。

すでに、私たちは今週の学びを頂いたようなものです。問題山積、外では新型コロナウイルス、内では教区内の司祭の不祥事。心も身体もくたくたになる一年でした。それでも、「腕に幼子を抱いている」人は失望しません。救い主イエスは私たちが本来手にできない宝だったのに、私たちの手に収まる姿でおいでくださったからです。

よく考えると、「腕に幼子を抱いている」なら、一歩歩くのにも十分気を付けるでしょう。何かが起こっては大変だと、全神経を集中して守ろうとするでしょう。私たちが聖家族から受け取る模範は、「腕に幼子を抱いている」ということは、全神経を幼子に向ける覚悟も、聖マリアと聖ヨセフに倣って求められているということです。私がイエスにつながって日々を過ごし、成長していくためには、「腕に幼子を抱いている」つもりで信仰の務めを果たす覚悟も求められているのです。

簡単に言えば、「腕に幼子を抱いている」その人は、決して他のことに気を散らしてはいけないということです。その幼子と一緒に成長していきたいなら、「腕に幼子を抱いている」そのことを片時も忘れてはいけないのです。中田神父はすべての人に同じことを求めるわけではありませんが、あなたが気にしていることや悩んでいることは「腕に幼子を抱いている」その幼子よりも大事なのですか？これをよく考えて日々を過ごしましょう。

新型コロナウイルスの影響をまともに受けた一年でした。家庭での時間が多くなりました。家庭で中心にあったものは何でしたか。あなたは何を腕に抱いて過ごしましたか。私は今年のコロナ禍で、覚悟を新たにしました。「腕に幼子を抱いている」これを忘れずに日々を過ごしたいと自分に言い聞かせました。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)